



日本古典文学全集

神催梁閑

樂馬塵吟  
秘

歌樂抄集

臼田甚五郎  
新聞進一

小学館・刊

神楽歌催馬楽  
梁塵秘抄閑吟集

日本古典文学全集 25

昭和51年3月20日

初版発行

校注・訳者

うす だ じん ご ろう  
白 田 甚 五 郎  
しん ま しん いち  
新 間 進 一

発行者

相 賀 徹 夫  
東京都千代田区一ツ橋2-3-1

印刷所

図書印刷株式会社  
東京都港区三田5-12-1

発行所

株式会社

小 学 館

東京都千代田区一ツ橋2-3-1  
〔郵便番号〕101〔振替〕東京8-200  
〔電話番号〕編集東京03-264-8574  
製作東京03-230-5333  
販売東京03-230-5739

© Z. Usuda S. Sinma 1976

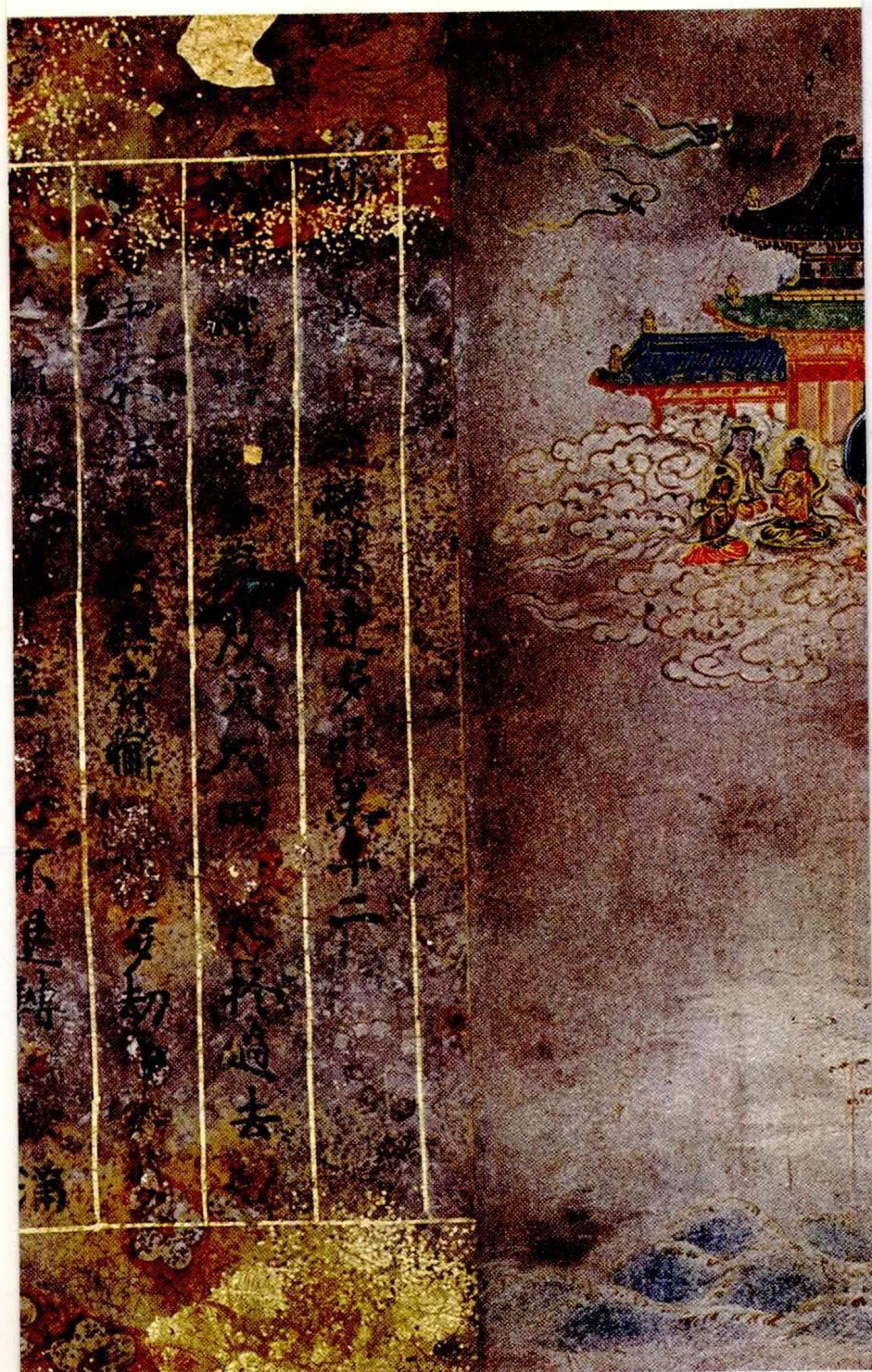
Printed in Japan

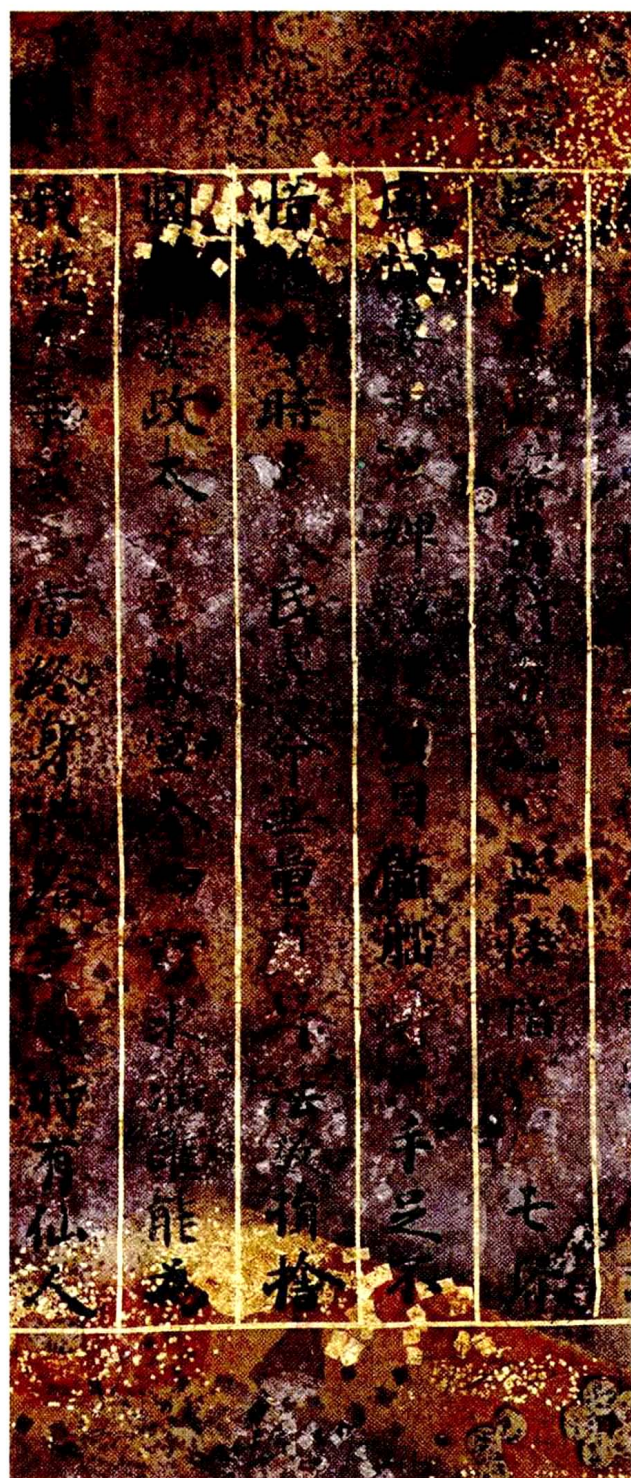
(著者検印は省略いたしました)

造本には十分注意しておりますが、  
万一落丁、乱丁などの不良品の場  
合は、おとりかえいたします。



広島・厳島神社蔵





『梁塵秘抄』の中には、『法華經』を讃える今様が数多く見えるが、同経二十八品その他を能書で書写し、各所に美しい絵をちりばめた『平家納経』もまた、同じ時代が生んだ貴重な文化財である。

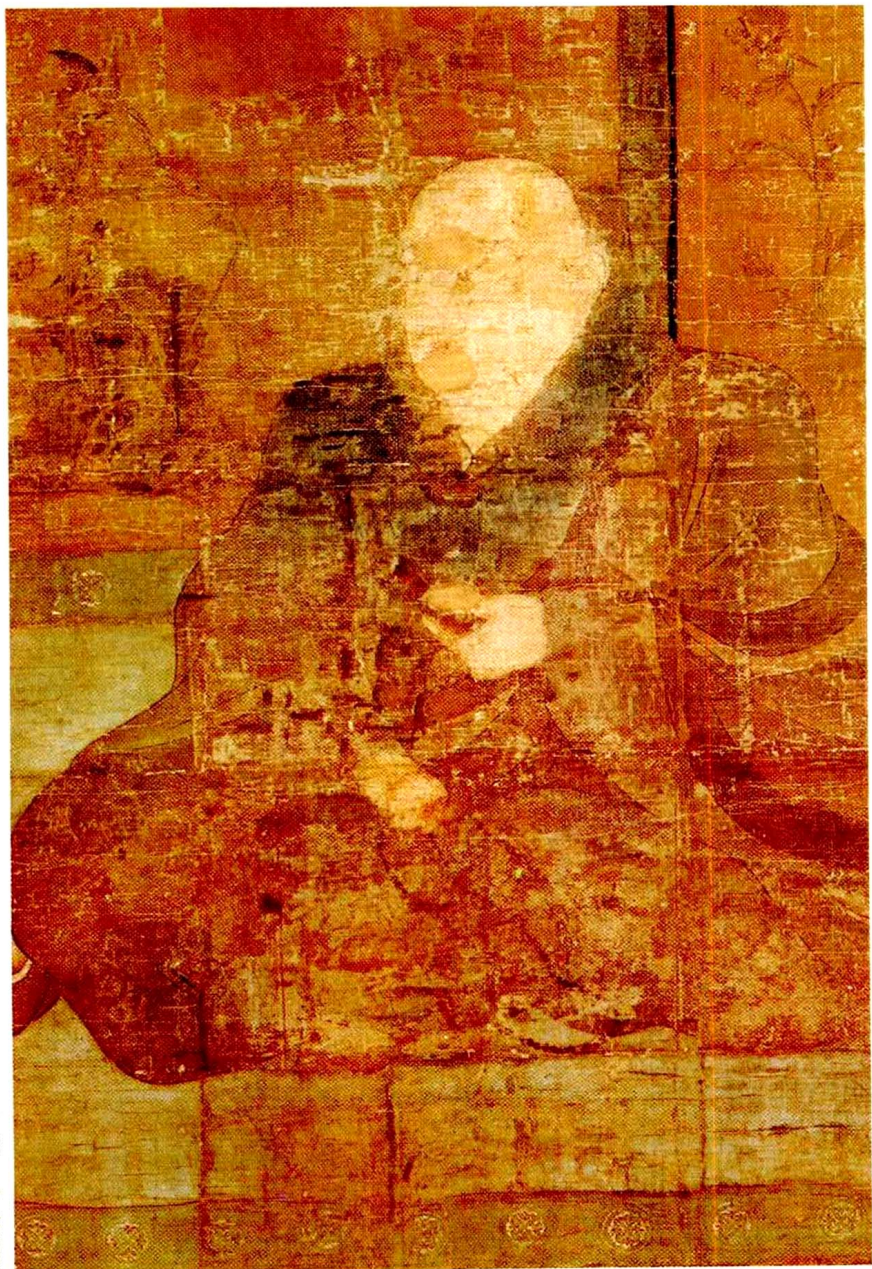
本図は見返絵に経意を描くものの一つである。一体、その身に五障があるとされた王朝女性にとって『法華經』五卷の提婆品の龍女成仏譚ほど、切実な信仰の対象はなかったであろう。この絵は、その説相の最も印象的な場面を描く。娑竭羅龍王の娘、八歳の龍女が、龍宮での文殊菩薩の教化により得道したこと

を証明するために、海中から釈迦説法の宝座の前に出現する場面である。二人の侍女を従え、飛来したところで、手には宝珠を盛った金碗を捧げている。

上方に講堂が見え、雲上の蓮華台に釈尊が座して六人の菩薩が侍している。天から降る蓮華・樂器も美しい。全体の図柄の構成が整っており、色彩もゆたかで、華麗・典雅な宗教画である。

なおこのあと、宝珠の納受がすむと、龍女はたちまち男子に変じて南方世界に赴き、成仏することになる。縦二五・五cm。

後白河法皇像

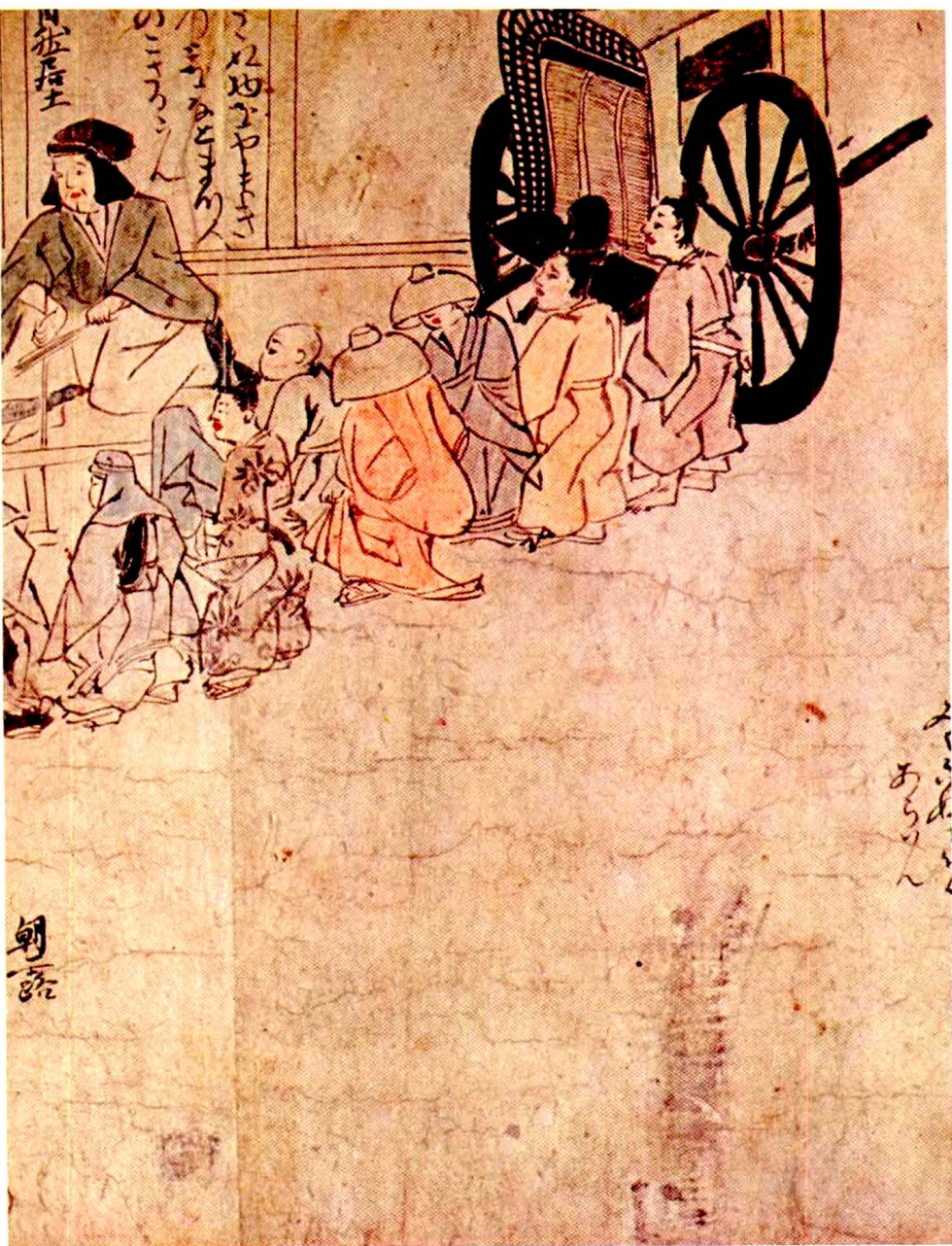


京都・妙法院藏

現存する後白河院の画像のうち、最も古く最もすぐれたもの。十二世紀後半、おそらく法皇在世中に描かれた画像に基づいての製作かと推定されている。経巻と数珠とを左右の手に持ち、ゆったりと座を占めた雄偉な法体姿（頸立衣・袈裟・指貫）であり、闊達な性格を物語るかのようである。

背景の花鳥の襖の描法には、宋画の影響が見られる。剥落がはなはだしいのが惜しまれる。縦九八・〇cm、横八二・四cm。

（新聞進一）



絵巻、一卷。詞は和歌四天王の一人、慶運法師、絵は藤原経隆（隆能の孫）と伝えられ、鎌倉末期の成立と考えられる『天狗草子』が、室町初期におよんで装いをやや改めて一異本として成立したものとされる。

詞は『天狗草子』の三井寺巻とはほとんど変わらないが、人物の会話や当時の諺い物などが、形式にこだわらず自由な筆致で書きこまれている。従来の作り絵による典雅な大和絵とは趣を異にした淡彩の画風は、やがて御伽草子絵巻へと移ってゆく過程を示している。

この画面は、詞の「また放下の禪師と号して髪を剃らずして烏帽子を着、坐禪の床を



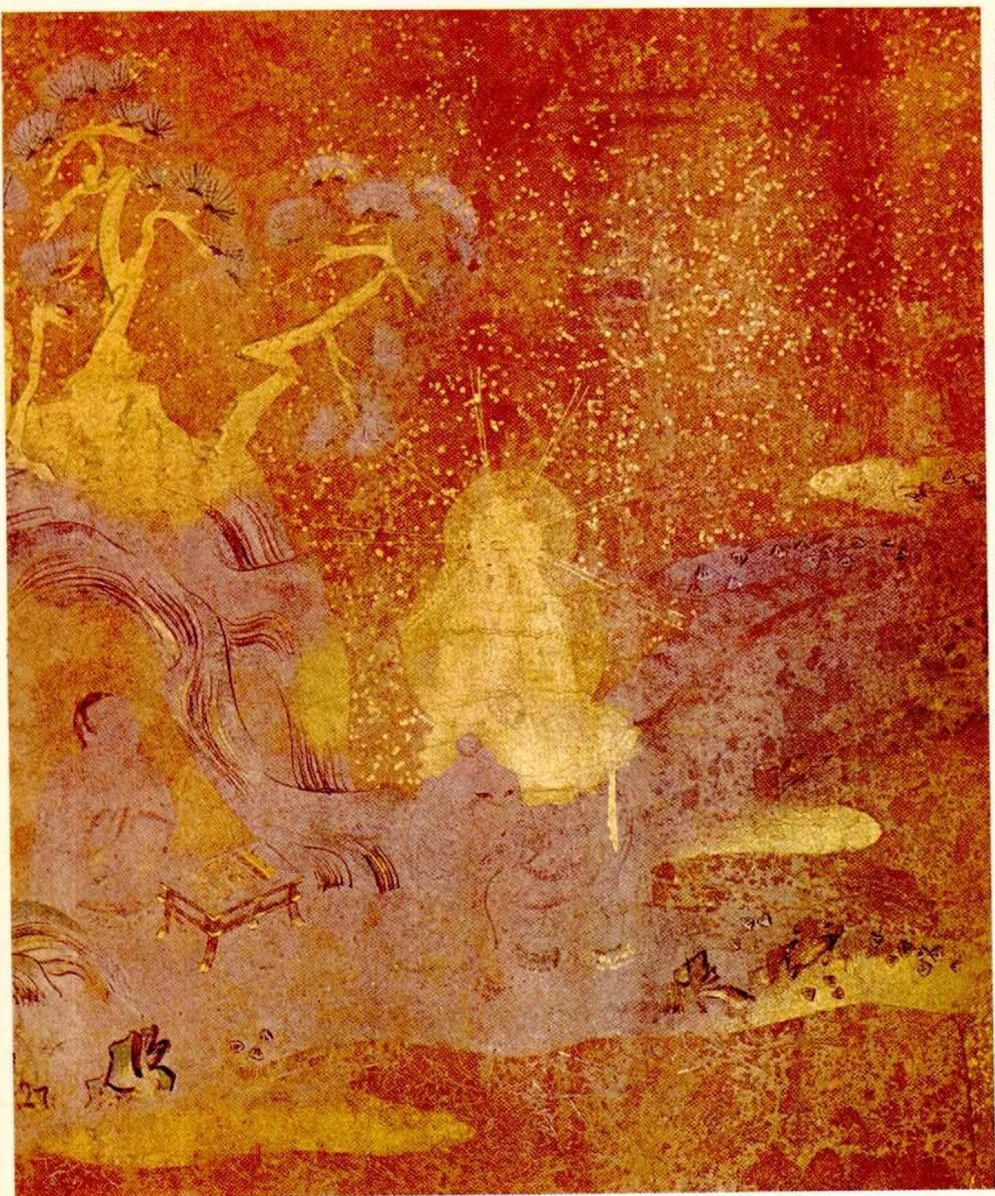
石川・宮本長興氏蔵

忘れて南北の巷に節摺り工夫の窓を出でて東西の路に狂言す」に相当するところ。  
 上部は有髪（あがみ）の自然居士（じぜんこ）が箆（へら）を摺っている図で、「さ、ぬ物をやまきのとを　なとまつ人のこさるらん」、「いつくよりきたるもしらぬさ、ら太郎無而忽有たる自然こしきそ」と、小歌および狂歌らしきものがそばに書かれており、下部には兼虫・電光・朝露なる三人の放下が旅行くさまを描いている。縦二六・九cm。

（徳江元正）

平家納經

法華經法師功德品第十九見返



妙法蓮華經法師功德品第九

尔時佛告常精進菩薩摩訶薩若善男子善

女人受持是法華經若讀若誦若解訖若書

寫是人當得八百四千萬那由他の無量阿僧祇劫

廣島・嚴島神社藏

本図は、ただ経意を  
絵画化するだけではな  
く、その経意を歌った  
今様を、絵の中にさり  
げなく隠して挿入する  
という、二重の構造を  
持ったものであり、そ  
の趣向・でき栄えにお  
いて、『平家納経』の  
数多い絵の中でも、珍  
重すべきものといえよ  
う。

絵の内容は、法師功  
徳品でなく、普賢菩薩  
勧発品の経意である。

人里離れた山の洞窟で  
『法華経』をひたすら  
読誦する行者の前に、  
普賢菩薩が白象に乗っ  
て出現するという場面  
が描かれている。

背景の松の樹や岩な  
どには、いわゆる「文  
字木」「文字岩」の手  
法で、漢字や草仮名が  
隠されている。

左上方に「しつかに  
山りん」などの文字が  
あり、右下方に「みえ  
給へ」、左下方に「す

んして」などに見える  
ようである。

これらは、絵ととも  
に判読すべきものであ  
るが、『梁塵秘抄』の  
168の歌に近い今様であ  
ることは確かで、亀田  
孜氏は「静かに山林独  
り居て、修道（行者の  
前にこそ）（普賢菩薩  
は）見え給へ」と解説  
されているが、なお読  
み方については問題が  
あろう。縦二七・七cm。

（新聞進一）



花乃錦志下ひきけて中  
くま柳のまをりて  
はまをりて錦志下ひき  
けり  
くまひきけて中  
くまをりて  
はまをりて  
はまをりて  
はまをりて

宮内庁書陵部蔵

神楽歌  
(右上)

東遊歌に続けて書写された卷子本。書写年代が平安時代にさかのぼる神楽歌の譜本のうちで、本書が最も多く神楽歌を総集する。

天地に黒界を施した  
 斐紙に、本文は万葉仮  
 名で墨書されているが  
 古風な平仮名字体をも  
 交える。延喜は「レ」  
 で示し、他本との校異  
 も傍書する。百、○、  
 一などの符号を朱書し  
 ているのが、見た目に  
 美しくうつる。上掲の  
 部分は採物（みきりもの）「神」  
 である。縦二七・五cm。

〔白田甚五郎〕

催馬楽（右下）

冊子本で、天治本『催馬楽抄』とともに書写が平安時代にさかのぼる貴重な文献である。天地に白界を施した鳥の子紙に、本文は

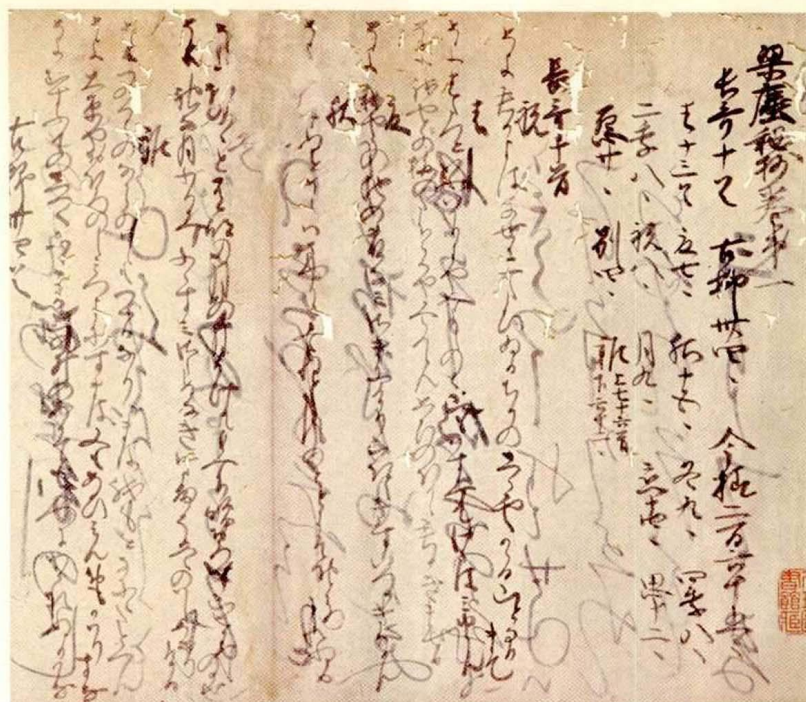
万葉仮名で墨書し、古風な平仮名字体をも交える。掲出の部分は巻頭で、源家流の譜本であるから、律旋の部から始まる。ちなみに藤家流は呂旋の部から始まる。縦二五・四cm、横一六・九cm。

(白田甚五郎)

閑吟集（上）

袋綴じの転写本、<sup>一</sup>冊。本文の用紙は雁皮紙、各丁十行書き。五丁の表から五十三丁の表にわたって、三百三十一首が記されている。各首の頭部に、朱で・印とそれぞれの出自を示す肩書とを記し、墨で鈎印<sup>かぎいん</sup>を付しているが、中には第三首目のように、これらの符号を欠くものもある。縦一九・〇cm、横二一・三cm。

（德江元正）



奈良・天理図書館蔵

佛哥廿四首

○釋迦のふ覚むるゝは、このたひゝゝ  
 とけいゝゝ五、百塵捨却よりもあれゝゝ  
 けゝけゝゝゝゝゝゝ  
 ○釋迦年居けゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 文殊も十二のゝ淨飯王もさゝゝゝゝゝゝゝ  
 やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 ○釋迦れみのれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 とたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

梁塵秘抄 卷第二

奈良・天理図書館蔵

卷第一、第二ともに後白河院撰。卷第一（綾小路家本）は室町時代の写しで、消息文の紙背に書写されたもの。楮紙を三枚継いだ卷子本。第三紙の五行目から『梁塵秘抄口伝集』卷第一断簡を取める。縦二八・四cm、横二八・四cm。

卷第二（竹柏園本）は二冊の袋綴じの冊子本。江戸時代末期の書写で、誤脱も多いが、表記などの点からみても、古い形をかなりよく伝えている上に、他に類本がなく貴重な存在である。縦二七・〇cm、横一九・五cm。（新聞進一）

# 目次

## 神樂歌

白田甚五郎校注・訳

解 説

二

凡 例

元

### 神樂歌次第

三

庭 火

三

阿知女法

元

採 物

四

櫛

四

幣

三

杖

三

篠

五

弓

七

劍

九

大前張

元

阿知女法

毛

大宜神

五

葛

五

杓

五

梓

五

木綿志天

元

難波方

元

宮人

元

催馬楽

白田甚五郎校注・訳

凡例  
解説

.....  
.....  
二九  
三二

校訂付記

.....  
.....  
一七

湊田 大宮 総角 殖春 篠波 磯等前 志都夜乃小菅 薦枕 小前張 脇母古 井奈野 階香取 前張

亢 矣 齒 𠂔 𠂔 𠂔 矣 矣 齒 齒 查 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔

神上 其駒 湯立歌 酒殿歌 竈殿遊歌 昼目歌 朝倉 木綿作 得錢子 明星 早歌 千歳法 蟋蟀

一五 一四 一三 一三 一三 一三 九 七 六 六 六 六 六 六